



②

キロリは イチヨウの木の精です。  
キロリは 自分の木が自慢です。  
なぜって、この木は どんな木よりも古くから  
この地球にあったから。  
ずーっとずーっと大昔、  
まだ恐竜がすんでいたころから、  
この木はありました。  
葉っぱの二つに割れたような筋は  
大昔の木にしかありません。

イチヨウの木には、不思議な力があるようです。  
その証拠に、キロリはオジイから、  
イチヨウの木の ひみつのいのりを聞きました。

オジイは言いました。  
「その祈りは一度しか使えない。  
それを使う時は、たくさんの人がいっしょの時」  
でもキロリは、ひみつの祈りのことなんか、  
すぐ忘れてしまいました。  
キロリには 困ったことがあったからです。



3

それは、

カラスのカースケと、ヒヨドリのフースケが  
自分の木の上で毎日、けんかをしていることです。



「カー、カー！」

お前たちは、

頭をぼさぼさにしていてだらしない。

しかも食いしん坊と来た！

こんなヒヨドリに、

この立派な木は渡さないぞ。カー！！」



「ギー、ギー！」

カースケ達はいつも、

大勢で、鳴きわめいてうるさいんだ！

そんな行儀の悪いカラスに、

この木をわたすもんか。ギイー！」

この2羽の終わらないけんかに、

同じ木に棲むツグミのグっちゃん

ムクドリのマー坊も困り顔。

キロリも、この様子を

イチヨウのうるの中から聞いていました。



④

ある日のこと、向こうから、

小さな人間の男の子がやってきました。

「キロリく、あそぼう。」と、男の子は言いました。



キロリ「モックンだ！」

モックンは、

キロリを見ることができると、ただ一人の人間です。

他の人間には、キロリは見えません。

キロリは急いで、木から下りて、

モックンの頭に飛び乗り、ブランコを始めました。



5

そのとき、

目の前のイチヨウの木から何かが落ちてきました。  
落ちてきたのは、

ヒヨドリのフースケではありませんか。

フースケは痛くて動けません。

モックンとキロリは、

驚いてフースケにかけよりました。

フースケはカースケに向かって怒鳴りました。



フースケ

「いたい、いたい、カースケが悪いんだ。  
らんぼうものは どこかへ行け！」

勝ち誇ったカースケが 上からいばっていました。



カースケ

「ボサボサフースケ。お前の負けだ。

お前のように なんの木の实でも

食べてしまう食いしん坊なやつは、

とおい国へとんで行け。

ここはわしらの木にするぞ！」

それを聞いたキロリとモックンは、

困ってしまいました。



6

やがて、秋になりました。

イチヨウの木は 何百何千という黄色い実を付け、  
地面におとしました。

そこへフースケたちがやってきて、

黄色い実をつついて、 おいしい実を食べました。

フースケの仲間には、

種を口にくわえて運んでいき、

あわてて空から落としているものもいます。

イチヨウの実は 見る見るうちに

辺りの土の中に散っていきます。

春になると、イチヨウの赤ちゃんがでてきそうです。

モックンも イチヨウの実を拾いにやってきました。

中の実がおいしいことを 知っているからです。

カースケたちも、 負けずに食べようと思いました。



カースケ

「なんだ、なんだ、このにおい。」

「こんなくさいもの、たべられるか。」

そう言って、カースケたちは、

まちの方へとんでいってしまいました。

黄色い実のおかげで、イチヨウの木は

ヒヨドリ、フースケたちの家になりました。

キロリは、これで少し静かになったかなと

ホッとしていました。



⑦

秋も深まったころ、毎日雨が降り続けました。  
キロリは イチヨウの木がとんとん年をとって  
弱っていくのが心配でした。  
うるの中に座って、雨の強い音を聞いていると、  
だれかがよんでいる声がします。

モックン 「キロリー、元気ー？」

「雨で遊べなくてつまらないねー。」  
モックンでした。

キロリ 「元気だよ。」

でも、イチヨウの木が 「元気がないんだ。」

モックン 「そうなの？ どうしたら、元気になるのかなあ。」

キロリ 「昔、オジイが言っていたんだけど、

落ちたイチヨウの葉を たくさん集めて、  
生きものの形にすると、  
地面から、命の力がわいてくるんだって。  
その力で、  
イチヨウを元気にできるかもしれない！」



8

次の日、雨が上がると、  
モックンは友達を連れて、  
イチヨウの木の下にやってきました。



モックン

「みんなでイチヨウの葉で、  
生きものを作ろう！」

みんなでせっせと

黄色いイチヨウの葉をひろっていると、  
ガヤガヤ空から降りてきたものがあります。

物まねが大好きなカースケたちでした。  
口にイチヨウの葉をくわえては、  
子ども達のところへ葉を運んできます。  
すると、ヒヨドリの子も真似をして、  
葉を運んでいきます。

【作業の指導へ】 ※下記参照

【指導者用の言葉の例】  
イチヨウの木を元気に  
するために、みなさん  
もイチヨウの葉で、い  
ろいろないきものを  
作ってみませんか。  
(子ども：はい)  
では、イチヨウの葉で  
画用紙に好きな生き物  
を考えて貼ってみま  
しょう。

【創作活動(20分程)】  
では、みなさんのつ  
くった生き物をイチヨ  
ウの木に向かってみせ  
てください。  
そして何の生き物が教  
えてあげてください。

【発表】

あつという間に、たく  
さんのイチヨウの葉が  
集まり、次々に地面に  
生き物たちが出来上  
がっていきます。

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

協力：東京家政大学人文学部教育福祉学科 宮地ゼミ

この紙芝居は、東京ガス環境おうえん基金の助成を受けて、作成しています。



9



「チヨウ・花・トンボ・クワガタ・おどり子・ライオン・ネコ・イヌ・ラツパ・

〔実際に作ったものにあわせて〕

すごいな、こんなにたくさん。〕

キロリは喜びました。

みんなのおかげで

なんだかイチヨウの木が 元気になっていきます。

その様子を見て、キロリがさけびました。



「木のいのち、木のいのち、大きくなあれ!!

ドドンガードーン。〕

キロリは、オジイから聞いていた

大勢がいるときに 一度しか使えない、

ひみつのいのりを使いました。

みんなも真似をしていました。〔参加者にも呼びかける〕

「木のいのち、木のいのち、大きくなあれ!!

ドドンガードーン。〕

すると、年をとったイチヨウの木が

「ブルルーン、ブルルーン、ブルルーン。〕

と体中をふるわせて、 せのびをしたかと思うと、

全身で、体を広げて、

みるみる立派なイチヨウの木になりました。





10

「ワァー、世界一立派なイチヨウの木だー。」  
みんな大よろこびです。  
カースケも、フースケもグっちゃんもマー坊も、  
モックンや子どもたち、キロリも、  
みんな大喜びです。

世界一大きなイチヨウの木は、  
だれのすみかになったのでしょ。う。  
とても大きな木なので、  
カースケもフースケもグっちゃんもマー坊も  
みんなですんでもまだ大丈夫！  
キロリは仲良くなった鳥たちを見て、  
モックンと微笑みました。  
イチヨウの木は、みんなが作った生きものと、  
ひみつの祈りのおかげで、  
今まで長く生きてきたのかもしれないね。



創作童話 『木の精キロリのひみつのいのり』

①

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

address : 〒174-0063 東京都板橋区前野町4-8-6

tel & fax : 03-3960-6052 e-mail : info@npo-soe.jp

協力：東京家政大学人文学部教育福祉学科 宮地ゼミ

この紙芝居は、東京ガス環境おうえん基金の助成を受けて、作成しています。